

白居易の「竹林七賢」観

The Baijuyi (白居易)'s View of "Zhulin Qixian (竹林七賢)"

河野哲宏

要旨

中尾健一郎氏は、「洛陽時代の白居易と魏晋の士人——『竹林七賢』を中心に」において、白居易が洛陽に閑居した大和三(八二九)年以降とそれ以前という二つの時期での詩を比較し、その変化から白居易の後半生の処世を読み取り、「彼ら(引用者注:「竹林七賢」や陶淵明等)の如く危難を避けようとするならば、やはり中央政界に執着の無いことを示す必要があったのではないか」という仮説を論証されている。中尾氏の論考が示す分析・結論は、妥当なものであり、大いに賛同するところであるが、中尾氏が論証に用いたのは、白居易の「竹林七賢」に言及した詩のすべてではない。そこで、小論では、白居易の「竹林七賢」に言及したその他の詩でも、中尾氏の出された仮説に沿った表現を読み取ることができることを示す。

キーワード

白居易、竹林七賢、阮籍、嵇康

はじめに

唐という時代を見渡せば、盛唐の李白、杜甫の名は絶大なる存在感を持つ。そして、二人に勝るとも劣らない詩人として、中唐の白居易の名が挙げられるだろう。これまで筆者は、詩に見られる「竹林七賢」の描かれ方を見てきた。それらは、六朝の顔延之、庾信、盛唐の李白、杜甫、そして宋の蘇軾と、それぞれの時代を代表する詩人の詩である。となると、李白、杜甫の後、蘇軾に至るまでの間の時代を代表する詩人として、白居易の詩を見ないわけにはいかないだろう。

しかし、白居易の研究は古くから行われており、白居易の詩に現れる「竹林七賢」に触れた研究も存在する。特に、白居易にとって、「竹林七賢」は何を示すのかという観点から行われた研究に、中尾健一郎氏の「洛陽時代の白居易と魏晋の士人——『竹林七賢』を中心に」がある。

そこで、小論は、中尾氏の研究を受け、その指摘するところを、中尾氏が用いなかった材料、または問題としなかった細部を用いて、論証することを目的とした。つまり、阮籍、嵇康、劉伶の三者という中尾氏の限定（白居易の詩による「竹林七賢」への言及自体が、ほぼこの三者に限られるが）を継ぎ、そしてその内の阮籍と嵇康への認識を読み解くことになる。よって、「白居易の『竹林七賢』観」と銘打ってはいるが、その実、問題とするのは阮籍、嵇康の二人である⁽¹⁾。

まず、第一章にて、中尾氏の考察を確認し、第二章では、「阮籍に関する詩」、第三章では、嵇康に関する詩を見る。

第一章 先行研究の確認

まず、前提となる中尾氏の考察²⁾を確認したい。

中尾氏は、阮籍、嵇康、劉伶に言及している詩を、洛陽時代以前と洛陽時代とに分けて比較している。特に中尾氏が注目するのは、洛陽時代以前と洛陽時代に詠われた「竹林七賢」への言及の変化によって見られる、白居易の後半生の処世についてである。

洛陽時代以前の作とされているのは、次の作品である。()内に言及されている部分を挙げる。

- ・「唐生に寄す」(「賈誼哭時事、阮籍哭路岐。」)
- ・「馬上の作」(「彈琴復有酒、但慕嵇阮徒。」)
- ・「酒に對す」(「所以劉阮輩、終年醉兀兀。」)
- ・「王質夫を哭す」(「篇詠陶謝輩、風襟嵇阮徒。」)
- ・「微之の詩に和す二十三首」其の十一「新樓北園に偶集し、孫公度、周巡官、韓秀才、盧秀才、范處士を従へて小飲す、鄭侍御判官、周、劉二從事皆先に歸るに和す」(「天地為幕席、富貴如泥沙。嵇劉陶阮徒、不足置齒牙。」)
- ・「秋齋」(「阮籍謀身拙、嵇康向事慵。」)
- ・「讀史五首」其の二「馬遷下蠶室、嵇康就囹圄。」)

- ・「雜感」〔呂安兄不道、都市殺嵇康。〕
- ・「慵を詠ず」〔常聞嵇叔夜、一生在慵中。〕
- ・「馬侍御の贈らるるに答ふ」〔淺薄求賢思自代、嵇康莫寄絶交書。〕
- ・「微之の詩に和す二十三首」其の十六「鄭侍御が東陽にて春悶に懷を放にし越遊を追ひて寄せられしに酬ゆるに和す」〔生何足養嵇著論、途何足泣楊漣瀕。〕
- ・「陶潛の體に效ふ詩十六首」其の十三〔晉朝輕高士、林下棄劉伶。〕
- ・「橋亭卯飲」〔生計悠悠身兀兀、甘從妻喚作劉伶〕

洛陽時代以前では、並称を含め、阮籍六例、嵇康九例、劉伶四例が見られる。詠われる属性では、並称では、「名利や富貴をもものともしない風雅な先人」という属性が挙げられている。また、単独での言及では、「困難な時世を生きた先人」といった属性が挙げられている。これら詠われた属性から白居易の認識をまとめれば、

つまり洛陽時代以前の白居易にとって、阮籍・嵇康・劉伶は風雅の徒であると同時に、同情すべき先人として意識されていたと言える⁽³⁾。

となるのだろう。

次に、洛陽時代のものとしては、次の作品が挙げられている。同様に（ ）内に言及している部分を挙げる。

- ・「琴酒に對す」〔祇応康与籍、及我三心知。〕
- ・「詩酒琴の人、例として多くは薄命なり、予酷だ三事を好む、雅に此科に當れり、而るに得る所已に多く、幸たること斯に甚し、偶狂詠を成し、聊か愧懷を寫す」〔中散步兵終不貴、孟郊張籍過於貧。〕
- ・「鄭二司録と李六郎中と寒食の日相過り、同じく宴して贈らるるに酬ゆ」〔迎接須矜疏傅老、祇供莫笑阮家貧。〕
- ・「令狐留守尚書が贈らるるに酬ゆ十韻」〔慵於替叔夜、渴似馬相如。〕
- ・「老慵」〔近来漸喜知間断、免恼替康索報書。〕
- ・「詠懷」〔替康日日懶、畢卓時時醉。〕
- ・「晩に香山寺に歸り因りて所懷を詠ず」〔嘗聞替呂輩、尤悔生疎頑。〕
- ・「皇甫郎中が秋曉同じく天宮閣に登り懷を言ふに和す六韻」〔張翰一杯酣、替康終日懶。〕
- ・「洛下に閑居し山南の令狐相公に寄す」〔不鍛替康彌懶靜、無金疏傅更貧閑。〕
- ・「家醞を詠ず十韻」〔独醒従古笑靈均、長醉如今數伯倫。〕
- ・「詠興五首」其の五「小庭にも亦た月有り」〔幕天而席地、誰奈劉伶何。〕
- ・「北窗の三友」〔嗜詩有淵明、嗜琴有啓期。嗜酒有伯倫、三人皆吾師。〕
- ・「洛陽に愚叟有り」〔抱琴榮啓期、縦酒劉伶達。〕
- ・「崔二十四常侍を哭す」〔伯倫每置隨身鍾、元亮先為自祭文。〕
- ・「吳秘監美酒有る毎に、獨り酌み獨り醉ふ、但し詩報を蒙るのみにして、飲を以て招かず、輒ち此に戯れ酬い、兼ねて夢得に呈す」〔頼有伯倫為醉伴、何愁不解傲松喬。〕

・「醉中上都の親友の書を得るに、予が俸を停められしこと多時なるを以て、貧乏を憂問す、偶酒興に乗じ、詠じて之に報ゆ」（『異世陶元亮、前生劉伯倫。』）

洛陽時代では、阮籍は減少して三例となり、嵇康は八例でほぼ変わらず、劉伶は増加し七例となっており、中尾氏は大幅に増加したとされている。また、洛陽時代以前に多く見られる並称が減り、個人での言及が多くなる。それにつれて、彼らを「風雅の徒」として詠わなくなっているとされている。『阮籍の属性として挙げられるのは、「琴酒を好んだ」、「地位が低かった」、「貧しかった」である。

嵇康の属性としては、半数の四例が「慵」、「懶」について言う。そして、中尾氏は、嵇康の例の数が洛陽時代以前に比べて変わらないことから、「白居易が甚だ嵇康を好んだことを窺わせる」としている。

劉伶への言及が増えたことは、「晩年の白居易が、嵇康に決しておとらないほど劉伶を愛好したこと」を示すとされている。また、洛陽時代以前では多く見られた嵇康・阮籍との併称がなくなり、陶淵明との並称が増えていく。これは、『『達者』としての陶淵明と劉伶に甚だ親近感を覚えた』からであるとしている。

また、阮籍・嵇康／劉伶・陶淵明という対立を同情／敬慕という対立として捉え、阮籍・嵇康から劉伶・陶淵明へと言及の軸が動いていくことも指摘している。阮籍・嵇康の持つ「名利を超越した」／「時流に抵抗した」という二面性のうち、「時流に抵抗した」という一面が、白居易の当時の政治的な状況・志向を踏まえると、「阮籍と嵇康が師として賞揚する人物としてふさわしくなかった」としている。つまり、「彼ら（引用者注：『竹林七賢』や陶淵明等）の如く危難を避けようとするならば、やはり中央政界に執着の無いことを示す必要があったのではないか」⁴

ということになる。中尾氏は、いくつかの白居易の詩を引き、当時の状況を踏まえて、この仮定を論証している。ここまで、中尾氏の論考を見てきた。中尾氏が提出した白居易の「竹林七賢」への認識について、筆者は大筋同意する。

しかし、中尾氏が白居易が「竹林七賢」に言及した例として挙げられているのは、姓名や別称の類を挙げ、直接的に言及したものである。それでは、「竹林七賢」に関わりのある故事を引いている場合、中尾氏の指摘していた白居易の「竹林七賢」への認識との間に、差異が見られるのだろうか。

この点を確かめるため、小論では、中尾氏が採用した洛陽時代以前と洛陽時代という区分を引き継ぎ、主に阮籍に関わる故事を引いた例と、「竹林七賢」に言及した詩の細かい描写を中心に、中尾氏の提出した白居易の「竹林七賢」への認識を確認していきたい。

第二章 阮籍に関わる故事の使用

白居易が阮籍に関わる故事を引いている作品は、九例見られた。そのうち、故事によってまとめれば、「青眼」「白眼」などの「眼」に関わるもの六例、「途窮」に関わるもの三例である。まず、「眼」に関わるものから見ていく。⁵⁾

第一節 「青眼」、「白眼」

阮籍が俗士を憎んだことを表現する、次のような故事がある。

阮籍は青眼と白眼を使い分けることができ、俗士を見るときは、白眼で対した。嵇喜が弔問に訪れた際、阮籍は白眼で対し、嵇喜はそれを喜ばず帰った。嵇喜の弟の嵇康はこのことを聞き、酒を用意し琴を脇に手挟んで来ると、阮籍は大いに喜び、青眼で対した。⁽⁶⁾

洛陽時代以前に、「青眼」、「白眼」など「眼」に関わる阮籍の故事を引いたものは、三例見られた。まず、「江樓にて夜元九の律詩を吟じ三十韻を成す」である。部分のみ挙げる。

君と私は各々詩がたくさんあるが、

遠く隔たり互いに海に投げ捨てるようなやりとりとなっている。

詩を詠うたびに白髪は増え、

青眼でもって視野に穴が空くほど君のいる遠くを眺める。⁽⁷⁾

この詩は、遠く離れた土地にいる友人、元稹を思つて詠われたものである。ここでは、自身の眼を阮籍が気の合う仲間へ向けた「青眼」に譬えて、元稹への思いを表現している。

次は、友人の眼差しを「青眼」に譬えたものである。

「春雪に皇甫の家を過る」

夕方駕籠に乗って雪の中を出掛けてみれば、

うれしいことに君の家の門がちょうど開くのに行きあった。

この上は主人である君が青眼でもって接してくれば、

琴酒談笑が自然と生じるだろう。⁽⁸⁾

ここでは、俗士には決して向けられない「青眼」が、白居易に向けられている。友人との親密さという含意とともに、白居易の自分は俗士ではないという自負が読み取れる。

そして、次の「蘇庶子に答ふ」では、白居易と友人双方がともに「青眼」であることが述べられる。

たまたま関東への使者に命じられ、

また洛陽にて君とともに遊んだ。

病のために酒を断ち、

老いて愁えているばかりだ。

君と互いに青眼でもって親しむが、

共に挫折を味わった白髪頭だ。

私は宮中の閑職に身を置くが、

君の太子付きの役職も似たようなものだろう。⁽⁹⁾

先に挙げた「江樓にて夜元九の律詩を吟じ三十韻を成す」では、遠く離れた友人を思い、「春雪に皇甫の家を過る」では、友人が迎えてくれたことを「青眼」を用いて表現していたが、この詩では、友人と会っている際か、またはその交友を思い出して詠っているのです、どちらかが「青眼」のではなく、双方が「青眼」として描かれている。

以上、洛陽時代以前の三例を見た。次に、洛陽時代での「眼」に関わる阮籍故事の使用例を見ていく。まず、「青眼」を用いたもの二例を先に見る。「酔後重ねて晦叔に贈る」の部分のみ挙げる。

君と私は詩癖があり、

ともに酒を飲むことで仙人になろうとした。

青眼を巡らして笑いながら語り合い、

酔っては白髪頭を並べて眠る。⁽¹⁰⁾

この詩も洛陽時代以前の最後に挙げた「蘇庶子に答ふ」と同様、友人との交友を描いたものであり、双方が「青

眼」として表現されている。

次の場合は、双方ではなく、「青眼」を向けられるのが白居易であるものである。

「劉汝州が侍中に長句を寄せらるるに酬ゆるに和し、因りて集賢坊の勝事を書きて、戯れて之に問ふ」

私のいる洛陽と君のいる汝州は境界を接しているが、

私と裴度とは互いの家を行き来している。

汝州にいる君（劉禹錫）との距離は遠くはないが、

裴度とは百歩余りの距離なのでより親密なのだ。

裕福な裴度の宴会にしばしば呼ばれ、

私が酔って吐いてもその青眼に笑みを湛えて許してくれる。

聞くところによると汝州の役所には酒があるそうだが、

風流な景色を前に共に飲む友人はいるのかな。^①

この詩で「青眼」でもって白居易を見るのは裴度であり、白居易は見られる位置にある。また、この詩では、次の丙吉の故事も用いられている。

丙吉の馭者に酒好きで、しばしば職務を怠ける者がいた。あるとき丙吉に従って出かけたが、酒に酔って丞相

の車で吐いてしまった。西曹主吏がこの馭者を斥けようとすると、丙吉が言った。「酒による失敗で処分して
いたら、この人を受け入れてくれるところがあるだろうか。許してやってくれ、車の敷物が汚れただけじゃな
いか」と。こうして馭者は去らずにすんだ。¹²

この故事を用いて、白居易を馭者に、裴度を丙吉に譬え、裴度の度量の大きさと親密さを描いている。「青眼」
の故事を加えて解釈すれば、この馭者（＝白居易）は、酒に酔って車を汚すが、俗士なのではないということを示
すのだろう。

また、末尾の二句は、詩題に言うとおりの「戯れて」言っていると思われるが、「酒を飲むときには呼んでほしい」
という意味で捉えられないだろうか。

『世説新語』「任誕」篇（歩兵校尉缺）条 注引『文士傳』に、次のような故事がある。

後に歩兵校尉の役所に酒が三百石有るのを聞き、喜んで歩兵校尉の職を求めた。役所に入ると、劉伶と共に思
う存分飲んだ。¹³

末尾の二句が、この故事を踏まえた表現と考えれば、「友人の役所に酒があることを知って、お相伴に預かろう
としている」という構造を踏まえているのだろう。ここでも「青眼」を用いた場合同様、「阮籍を友人に擬え、白居
易自身はその「青眼」に見られる位置（ここでは劉伶）にある。

「青眼」を用いた場合では、友人、自分、双方という三者の内の誰かが、阮籍の位置にある。そして、洛陽時代以前と洛陽時代とに大きな使用上の変化は見られない。

次の「春深に和す二十首」其の十一では、一例だけではあるが、「青眼」ではなく「白眼」が使用されている。

春がすばらしいのはどこだろうか、

それは隱者の家。

薜蘿の葉で作った服を着て、

松の花を晒して食料とする。

蘭で作った帯に帯玉を差し、

蒲を車輪とした車が停まっている。

林の間で足を投げ出して座り、

軽蔑した目つきで俗人をにらむ。⁽¹⁴⁾

この「春深に和す二十首」は、冒頭二句がほぼ同じであり、それぞれ詠われる対象が、「何處春深好、春深隱士家。」の「隱士」の部分で入れ替わる。第一句にて問いを立て、第二句以下でそれに答えていく形式であることにより、描かれる人物への仮託とはならない。

この詩は、「隱士」対象として詠っているが、明らかに阮籍をイメージしているのが読み取れる。冒頭二句によ

るテーマの提示のあと、第三〜六句では、隠者の生活が描かれる。そして、末尾の二句で、隠者の典型として阮籍に譬えて「隠士」を描いている。その描写を細かく分析すれば、「林の間（林間）」というのは、「竹林」をイメージさせ得る。また、時の権力者の前でも「足を投げ出して座る（箕踞坐）」ことは、阮籍の故事として知られている。そして、「軽蔑した目つき（白眼）」で俗人をにらむ（向人斜）。これだけ阮籍をイメージさせる言葉を用いるのは、白居易が典型的な隠者として阮籍を認識していたからだろう。

しかし、この詩で重要なのは、いかに阮籍を描いたかではない。ここで重要なのは、阮籍の故事を用いて、「阮籍」など阮籍を直接示す語を用いずに、阮籍を描きつつも、白居易自身はその描かれる「隠士」を観察する立場に身を置いていることである。この「春深に和す二十首」という詩に採用された形式や、「白眼」の使用例が一つしかないことから、簡単に比較はできないが、推測を逞しくすれば、「青眼」を使用した場合に比べて、白居易が自身を阮籍に仮託することを慎重に避けているのではないだろうか。

また、「青眼」は「白眼」と表裏一体の概念だが、「青眼」は主に親愛を示し、反対に「白眼」は俗士の排除という攻撃性を含む。このような「白眼」という語の持つ攻撃的なイメージが白居易に仮託を避けることを促したのではないだろうか。

これは、第一章にて見た中尾氏の言う阮籍の一面、「時流に抵抗した」という属性が自身に付属することを避けるという行動を示す例となるだろう。

第二節 「途窮」

『晋書』卷四十九「阮籍伝」には、次のような記載がある。

ある時気の向くまま一人車に乗って出掛け、わき道を通らずに車を走らせ、道の窮まったところまで行き、慟哭して帰って来た⁽¹⁶⁾

この記載では、阮籍が思うままには生きられない苦しさが表現されていると考えられる。

前節では「青眼」、「白眼」という「眼」に関わる故事を用いた例を見たが、ここでは、「途窮」の故事を用いた例を見ていく。

「途窮」の語は、後藤秋正氏に従えば⁽¹⁷⁾、顔延之「五君詠」に始まる。「五君詠」の該当箇所は次の通り。

人の善し悪しを論じることはないが、行き詰っては慟哭するばかりだ。⁽¹⁸⁾

顔延之は「五君詠」で、阮籍の「途窮」の故事を念頭に、阮籍の上手くないか、行き詰ったという心境を表現していると考えられる。白居易が阮籍と「途」の関係を意識していたことを示す次のような例がある。「唐生に寄す」の冒頭部分を挙げる。

その昔賈誼は時事に哭し、

阮籍は岐路に哭した。

唐生も今哭しているのは、

時代は異なるがその悲しみは彼らと同じだ。¹⁹⁾

この詩は、洛陽時代以前の作である。ここでは、阮籍が分かれ道に泣いたと言う。「途窮」という語を用いては
いないが、「岐路」を用い、阮籍と「途」という関係を意識していたことが窺える。

次の「渭村に退居し、禮部の崔侍郎、翰林の錢舎人に寄する詩一百韻」では、「阮籍」などの阮籍を直接示す語
は用いず、「途窮」を用いている。部分のみ挙げる。

道が行き詰って憔悴するばかりで、

道があつたらあつたで彷徨うことになる。²⁰⁾

ここでは、道があつても無くても悪い結果となってしまうという白居易の苦悩の様が述べられているが、やはり
念頭にあるのは阮籍だろう。

「洛陽時代以前の作はこの二例しかない。「唐生に寄す」では、友人を阮籍に擬え、「渭村に退居し、禮部の崔侍
郎、翰林の錢舎人に寄する詩一百韻」では、自身を阮籍に擬えている。

それでは、洛陽時代になるとどうなるだろう。

「春深に和す二十首」其の二

春がすばらしいのはどこだろうか、

それは貧賤の家。

庭は荒れ果て、

あたりの花は散り失せる。

男は他人に雇われることに苦しみ、

妻は車引きに出なければいけないことを愁う。

道が行き詰れば平らな道でも険しく感じるものであり、

一歩進むことも褒斜谷を越えることより大変に思うのだ。⁽²¹⁾

「春深に和す二十首」其の十一は先に「白眼」を用いた例として挙げた。この詩は、同様な形式で、「貧賤」を対象としている。先に述べたことだが、この「其の二」でも、白居易は他者を描き、仮託という意図はない。自身や自分に近い友人などが「途窮」という状況に陥るのではなく、「貧賤」の人々が挙げられており、阮籍の「志を果たせない」という属性は読み取ることができない。

次の「新たに沐浴す」でも、「途窮」が使用されている。末尾の部分を挙げる。

どこかへ出征する人もいるだろうし、
旅に出る人もいる。

道が行き詰って食料がなくなる旅人もいるし、
寒く暗い監獄に繋がれる人もいる。

彼らはどうして苦しみ多い人生を送るのか、

思うままに生きる私は何が優れていたというのか。

胸を撫でて恥じるしかないのだ、

誰もその理由などわからないのだから。⁽²²⁾

この詩でも、「途窮」という状況にあるのは、無名の「旅人」である。ここまでは、先に挙げた「春深に和す二十首」其の二と変わらない。しかし、この詩では、「途窮」という状況にある者と対比的に、白居易自身が現れている。「苦しみ多い人生（勞生）」に対する「思うままに生きる（遂性）」私（白居易）である。

洛陽時代以前の作である「渭村に退居し、禮部の崔侍郎、翰林の錢舍人に寄する詩一百韻」では、「途窮」という状況にあった自分を語るが、洛陽時代の作である「春深に和す二十首」其の二では、仮託を意図せず、「新たに沐浴す」では、「途窮」の対極にある者として語られる。

このような「途窮」の使用法の変化は、何に起因するのだろうか。そして、「途窮」という、背後に阮籍が絶えずついて回る語をわざわざ用いるには、阮籍を好んだという理由以外に、何かしらの理由が必要だろう。

「途窮」という語の意味を、一般的な「行き詰る」といった意味ではなく、より政治的な部分に限定して定義し直せば、「途窮」とは、政治的な栄達を望むという欲望が満たされないという状況を示す語だと捉えられる。白居易が実際にこのように考えていたかどうかはわからない。しかし、中尾氏が「彼ら（引用者注「竹林七賢」や陶淵明等）の如く危難を避けようとするならば、やはり中央政界に執着の無いことを示す必要があったのではないか」と言うことを考慮すれば、白居易は、自身の政治的な栄達を望むという欲望が消失したことを示すため、もしくは欲望を隠すために、このように「途窮」の使用法を変化させたとは考えられないだろうか。

これを前提に、洛陽時代の阮籍に言及した詩を見れば、「琴酒に對す」では、

昔から琴や酒はあったが、

この素晴らしさをわかる者は稀だった。

ただ嵇康と阮籍、

そして私の三人だけがわかっているのだ。⁽²⁸⁾

と、琴と酒の素晴らしさがわかることを言う。これは、洛陽時代に言及が多く見られる劉伶への言及と同趣のものであり、「詩酒琴の人、例として多くは薄命なり、予酷だ三事を好む、雅に此科に當れり、而るに得る所已に多く、幸たること斯に甚し、偶狂詠を成し、聊か愧懷を寫す」では、

嵇康と阮籍は高位に上らず、

孟郊と張籍は貧窮の内に人生を過ごした。⁽²⁴⁾

と、高位に上らない（＝政治的な栄達を果たさなかった）ことが触れられる。そして、「鄭二司」と李六郎中と寒食の日相通り、同じく宴して贈らるるに酬ゆ」では、

お出迎えする老いぼれの私を憐れんでください、

もてなしを見て阮籍のような我が家の貧乏を笑わないでください。⁽²⁵⁾

と、阮籍の貧乏を自身の貧乏に譬える。このように阮籍を、酒を好み、高位に上らず、貧乏であった人物として描く。そして、このような阮籍に仮託されるのは、「詩酒琴の人、……」を除いて、老いぼれた白居易自身である。

「詩酒琴の人、……」では、白居易は阮籍と同じように三事を好みながらも、「榮名厚祿⁽²⁶⁾」を受けたことを言う。

このように、洛陽時代の作も細かい表現を見れば、中尾氏の言う「中央政界に執着の無いことを示す」ということを読み取れる。

第三章 嵇康と「慵」

前章では、阮籍に関わる故事を見た。この章では、嵇康について見ていく。しかし、嵇康に関する故事を用いた例は、白居易の詩では見つからない。よって、嵇康に言及した詩の細かい描写を中心に見ていく。

「中央政界に執着の無いことを示す」ということを、中尾氏は嵇康に言及した詩ではない詩で当時の状況を踏まえて論証された。しかし、嵇康に言及した詩だけでも、それが表現されていることを示せるのではないだろうか。

そこで、まず考えたいのは、なぜ洛陽時代になると嵇康とともに「慵」、「懶」を詠うことが多くなるのだろうか、という点である。そのうち、特に「慵」について、細かい描写とともに、洛陽時代と洛陽時代以前の詠われる属性の変化から考えてみたい。

先に洛陽時代になると、嵇康とともに「慵」を詠うことが多くなると言ったが、洛陽時代の作の中で、一つだけ傾向の異なるものがある。

「晩に香山寺に歸り因りて所懐を詠ず」

年は日々老いていき、

体は日々暇になつていく。

暇なときに都の門を出て見渡せば、

見えるのはただ山水の景色のみ。

関山は緑映えてそびえ立ち、

伊水の流れは清らかに流れている。

そんな景色の内に古びた寺があり、

戸締りもされていない。

岸辺の草は一休みするために敷いてあるようで、

小道の蘿はよじ登るためにあるようだ。

朝には浮雲とともにこの寺を出て、

夜には鳥とともに帰ってくる。

私は元々処世に拙い人間であり、

艱難辛苦がとりわけ多かった。

嵇康と呂安が、

とりわけ後悔したのは気分にもらがあり頑なだったことだそうだ。

また巢父は悟って箕山潁水の間に隠れ、

四皓は商山に隠れたそうだ。

彼らは世俗の拘束から離れることを好んだだけだろうか、

身に迫る心配事を避ける意もあったのではないだろうか。

私も同じように心配事を避けるため、
伊水高山の間に身を終えようと思う。²⁷⁾

この詩は洛陽時代の作であり、閑職に身を置く白居易の感慨を述べたものである。ここで言う、「嵇康と呂安」のことは、呂安の兄が呂安の妻に手を出したことによるもめ事に際し、兄弟の間を何とか取り持とうと努力した嵇康だが、「反対に兄から「不孝」の罪で訴えられた呂安に連座して処刑されたことを示していると考えられる。このような嵇康と呂安の最期の理由として、挙げられるのが「気分にもうががあり頑なだったこと」である。これは、同様な欠点で、向秀によって指摘されている。

しかしながら嵇康の志は遠大だがむらがあり、呂安の心は広大だが気ままである。²⁸⁾

このような欠点を持つ、嵇康と呂安に対するのは、隠者として著名な、巢父や四皓である。彼らに対し、単に隠遁しただけから隠れたのではなく、災いを避けるための意味もあったという白居易の解釈が示されている。この両者の内、白居易は、嵇康や呂安ではなく、巢父や四皓のように、世を逃れ災いを避ける方を選ぶことを宣言して、詩を終える。「私は元々処世に拙い人間である」という白居易自身の告白と、最終的な選択を比べ合わせれば、白居易は、以前は嵇康や呂安と同じように、思うまま生きていたが、今現在においては、悟った巢父や四皓のように、世間から隠れようと考えていることがわかる。

実際、白居易は洛陽時代以前の詩において、自身を「疏頑」としている。「常樂里に閑居し、偶たま十六韻を題し、兼ねて劉十五公興・王十一起・呂二旻・呂四穎・崔十八玄亮・元九稹・劉三十敦質・張十五仲方に寄す。時に校書郎爲り」の部分を挙げる。

都長安は名利の場、

鶏が鳴けばのんびりしている者などいない。

ただ一人なまけ者の私は、

日が高くなっても髪も整えていない。

(中略)

ひと月に二十日役所に勤めればよく、

私も気分にもらがあり頑な自分そのまま⁽²⁹⁾でいられる。

この詩は、登第し起家として校書郎となった時の作である。ここでは、自身を「気分にもらがあり頑な(原文「頑疏」)」としている。また、「なまけ者(原文「懶慢者」)」「髪を整えない(原文「頭未梳」)」⁽³⁰⁾という語から、自身を嵇康に擬えて、その属性である「気分にもらがあり頑な」「なまけ者」としていることは明らかである。

洛陽時代以前、自身を嵇康に擬えていた白居易が、洛陽時代に入ると、嵇康を否定し、巢父や四皓の振る舞いを選択する。この変化はどう説明されるだろうか。

洛陽時代以前の作では、「琴」、「酒」という属性を挙げる「馬上の作」、「風流」を挙げる「王質夫を哭す」、「超越」を挙げる「新樓北園に偶集し、……」、「処刑」に関わる属性を挙げる「讀史五首」其の二、「雜感」、「処刑」に加えて「養生」を挙げる「鄭侍御が東陽にて春悶に懷を放にし越遊を追ひて寄せられしに酬ゆるに和す」、嵇康の「山巨源に与ふ絶交書」をユーモアとして用いた「馬侍御の贈らるるに答ふ」と、嵇康の属性を多様に描いているが、洛陽時代になると、阮籍とともに詠われる場合、先に挙げた「晩に香山寺に歸り因りて所懷を詠ず」を除いたほとんどが、「慵」という属性を詠う。このような傾向を考慮に入れて、「晩に香山寺に歸り因りて所懷を詠ず」に示された白居易の見解を解釈すれば、次のようになるのだろう。

まず、嵇康／巢父・四皓という対立が見られる。そして、巢父・四皓と同じように隱遁を願う白居易が示される。また、「巢父・四皓」が災いを避け得た一つの理由として、「隱遁」ということが挙げられる。つまり、巢父や四皓も「隱遁」しなければ、嵇康と同様な結末になったかも知れない。これを逆から言えば、嵇康も隱遁していれば、「疏頑」が「心配事」の原因とはならなくなり、「巢父・四皓」と同じように、「心配事を避ける」ことができただのではないのだろうか、ということになる。

洛陽時代に描かれた嵇康の属性のうち、「酒」や「琴」のような阮籍とともに詠われるものを除けば、嵇康が個人的に詠われる属性は、「処刑」に関する属性と「慵」である。「処刑」は、「疏頑」が原因となったという白居易の見解を考慮すれば、「隱遁」することで、「疏頑」という属性が排除され、嵇康の個人的な属性としては、「慵」が残る。「晩に香山寺に歸り因りて所懷を詠ず」と、洛陽時代及びそれ以前に詠われた属性の変化を合わせ考えれば、このように説明できる。

前章で見たように、阮籍に関する故事を用いた場合も、白居易は、政治的な栄達を望むという欲望の消失を示すかも知しくは隠すために、「途窮」の語の使用法を変化させていた。

この章では、嵇康に関して、その詠われる属性の変化と「晩に香山寺に歸り因りて所懐を詠ず」から、白居易の思考を追跡してきたが、「慵」という属性が詠われるのが増えることが何を示すのか。

ここまで見てきた白居易の論理では、嵇康から「疏頑」という属性を取り除いてしまえば、「慵」に生きる隠者でしかないということになる。そして、そんな嵇康と白居易自身が同じだと、むしろ自分の方が「慵」であると洛陽時代以前から言っている。⁽³¹⁾つまり、洛陽時代の白居易は、「疏頑」という属性が無くなった嵇康であり、「慵」の中に生きる隠者であると宣言していると考えられる。これは、中尾氏の言う、「中央政界に執着の無いことを示す」という説に沿った白居易の自己表現と見做し得るだろう（小論で詩から抽出した白居易の思考や論理を、白居易自身がどれだけ自覚していたかはわからないが）。

おわりに

小論では、中尾氏の研究を受け、その指摘を中尾氏の用いなかった材料を用いて論証するということを目的とした。白居易の研究を進める中尾氏が、「竹林七賢」に言及した詩よりも、より白居易の後半生の処世への認識を示す詩を用いて考察されることは、当然のことだろう。

しかし、小論では、中尾氏の指摘が「竹林七賢」に言及した詩からも読み取れることを示した。これは、筆者の

白居易への関心よりも「竹林七賢」の描き方への関心の方が強いからである。しかしながら、小論が成立するには、よりわかりやすい形で、中尾氏が指摘されたおかげであることは確かである。

注

- (1) 劉伶を扱わない理由としては、本文後述の中尾氏論考で指摘されるように、劉伶に関する変化は、「量的」なものに過ぎず、小論が目的とする阮籍、嵇康に関して見られる「属性の変化」とは異なるためである。
- (2) 中尾健一郎氏「洛陽時代の白居易と魏晉の士人―「竹林七賢」を中心に」(『中唐文学会報』、第十八号、二〇一一年十月、一七―三六頁)。
- (3) 前掲論文、二二頁。
- (4) 前掲論文、二九頁。
- (5) 引用は『白居易集箋校』(上海、上海古籍出版社、二〇〇三年一〇月、第一版第二刷)による。なお、中国語文は拙訳で示し、注に原文を示す。
- (6) 原文「籍又能為青白眼、見禮俗之士、以白眼對之。及嵇喜來弔、籍作白眼、喜不擇而退。喜弟康聞之、乃齋酒挾琴造焉、籍大悅、乃見青眼。」(房玄齡等撰『晋書』、北京、中華書局、一九七四年一月、第一版、一三六一頁)。
- (7) 原文「各有詩千首、俱拋海一邊。白頭吟處變、青眼望中穿。」(前掲『白居易集箋校』、一〇五九頁)。
- (8) 原文「晚來籃輿雪中迴、喜遇君家門正開。唯要主人青眼待、琴詩談笑自將來。」(前掲『白居易集箋校』、一六〇四頁)。
- (9) 原文「偶作關東使、重陪洛下遊。病來從斷酒、老去可禁愁。款曲偏青眼、蹉跎各白頭。蓬山閑氣味、依約似龍樓。」(前掲『白居易集箋校』、一七三二頁)。
- (10) 原文「各以詩成癖、俱因酒得仙。笑迴青眼語、醉並白頭眠。」(前掲『白居易集箋校』、一九九六頁)。
- (11) 原文「洛川汝海封畿接、履道集賢來往頻。一復時程雖不遠、百餘步地更相親。朱門陪宴多投轄、青眼留歡任吐茵。聞道那齋還有酒、風前月下對何人。」(前掲『白居易集箋校』、二二一五頁)。
- (12) 原文「吉馭吏耆酒、數通蕩。嘗從吉出、醉歎丞相車上。西曹主吏白欲斥之、吉曰、以醉飽之失去士、使此人將復何所

容。西曹地忍之、此不過汙丞相車茵耳。遂不去也。」(班固撰、顔師古注『漢書』、北京、中華書局、一九七五年四月、第一版第三刷、三一四六頁)。

(13) 原文「後聞步兵廚中有酒三百石、忻然求為校尉。於是入府舍、與劉伶酣飲。」(劉義慶撰、劉孝標注、朱鑄禹彙校集注『世說新語彙校集注』、上海古籍出版社、二〇〇二年二月、第一版第一次印刷、六一一―六一二頁)。

(14) 原文「何處春深好、春深隱士家。野衣裁薜葉、山飯曬松花。蘭索初幽珮、蒲輪駐軟車。林間箕踞坐、白眼向人斜。」(前掲『白居易集箋校』、一八三〇頁)。

(15) 阮籍伝に「裴楷往弔之、籍散髮箕踞」とある(前掲『晋書』、一三六一頁)。

(16) 原文「時率意獨駕、不由徑路、車跡所窮、輒慟哭而反。」(前掲『晋書』、一三六一頁)。

(17) 後藤秋正氏は、杜甫の詩に見える「窮途」を、「あるいは旅先での生活のゆきづまりを言い、あるいは安史の乱以後も各地で戦乱が続く国家の情況とも結びついて自身の進路が見出せない悲痛な心境を表現している」(後藤秋正氏『窮途』補記・詩語のイメージ)『北海道教育大学紀要』人文科学・社会科学編、五三卷一号、二〇〇二年九月、二七―四二頁、引用箇所は二八頁)と説明している。

(18) 原文「物故不可論、途窮能無慟。」(蕭統『文選』成都、中華書局、一九八一年七月、第一版、三〇三頁)。

(19) 原文「賈誼哭時事、阮籍哭路歧。唐生今亦哭、異代同其悲。」(前掲『白居易集箋校』、四三三頁)。

(20) 原文「途窮任憔悴、道在肯傍徨。」(前掲『白居易集箋校』、八七六頁)。

(21) 原文「何處春深好、春深貧賤家。荒涼三逕草、冷落四鄰花。奴困歸傭力、妻愁出賃車。途窮平路險、舉足劇囊斜。」(前掲『白居易集箋校』、一八二八頁)。

(22) 原文「何處征戍行、何人羈旅遊。窮途絕糧客、寒獄無燈囚。勞生彼何苦、遂性我何優。撫心但自愧、孰知其所由。」(前掲『白居易集箋校』、二四七三頁)。

(23) 原文「自古有琴酒、得此味者稀。祇應康與籍、及我三心知。」(前掲『白居易集箋校』、二〇六〇頁)。

(24) 原文「中散步兵終不貴、孟郊張籍過於貧。」(前掲『白居易集箋校』、二二七八頁)。

(25) 原文「迎接須矜疏傅老、祇供莫笑阮家貧。」(前掲『白居易集箋校』、二二五五頁)。

(26) 原文「榮名厚祿」(前掲『白居易集箋校』、二二七八頁)。

- (27) 原文「我年日已老、我身日已閑。閑出都門望、但見水與山。闕塞碧巖巖、伊流清潺潺。中有古精舍、軒戶無扃關。岸草歇可籍、逕蘿行可攀。朝隨浮雲出、夕與飛鳥還。吾道本迂拙、世途多險艱。嘗聞嵇呂輩、尤悔生疏頑。巢悟入箕穎、皓知返商顏。豈唯樂肥遁、聊復祛憂患。吾亦從此去、終老伊嵩間。」(前掲『白居易集箋校』、二〇三七頁)。
- (28) 原文「然替志遠而疏、呂心曠而放。」(前掲『文選』、二二九頁)。
- (29) 原文「帝都名利場、雞鳴無安居。獨有懶慢者、日高頭未梳。」(中略) 三句兩入省、因得養頑疏。」(前掲『白居易集箋校』、二六三頁)。
- (30) 「山巨源に與ふる絶交書」に「性復疏嬾、筋驚肉緩、頭面常一月十五日不洗、不大悶癢、不能沐也」(前掲『文選』、六〇一頁)とある。
- (31) 「慵を詠ず」に「嘗聞嵇叔夜、一生在慵中。彈琴復鍛鐵、比我未爲慵。」(前掲『白居易集箋校』、三三五頁)とある。